

青年期のアイデンティティに関わる 学校教育における学びと教師の役割

小沢 一仁^{*1}

Learning in school education on Identity in adolescence and roles of teachers

Kazuhito Ozawa^{*1}

The purpose of this paper is to review learning on Identity in adolescence and roles of teachers. In school, students learn each subject and acquire the concept of each subject. When they go out to the society, each subject will give them a clue as to choose a job and a hobby. It is thought that purposes of study are economic principle and “bildung” principle. Each teacher has two roles; one is a role of messenger of each subject to students and the other is to be a bridge between students and each subject. This paper discusses that relation of education and Identity in adolescence.

1. 問題と目的

エリクソンのアイデンティティ概念を、教育にいかんにかせるだろうか。筆者は、これまで自己理解に寄与するためにエリクソンのアイデンティティ概念を理論的に検討してきた。そして、エリクソンの記述から居場所という自分と対象と他者の三角形という居場所の獲得がアイデンティティを得ることにつながると論じた(小沢,2004)。この理論的検討と平行して、教育心理学的視点からエリクソンのライフサイクル論とアイデンティティ概念を検討し、学校教育において居場所における対象という点で各教科を捉えようとしてきた(小沢,2014)。そこでは、青年期に焦点を当てれば、中学校、高校、大学での各教科の学びが、社会に出た時の居場所の選択において、いかなる意義を持つかを論じたのである。

その中で、学校教育において学ぶべき教科は、学校という居場所における打ち込む対象とした。勉強すべき教科を、時間割に従って、生徒および学生が学ぶ。その際に教科という、学校という居場所における対象は、大人として社会に出てからの居場所における対象についていかなる意味を持つか。そこで、各教科の内容が、居場所における出会いと深化という、意味を持つとした。つまり、中学校時代に出会った教科の内容を、高校時代に深化させて身につけ、その対象が、社会に出てからの居場所の対象となる可能性があることを捉えた。また、大学において学ぶ各学問が、教養科目及び専門科目として、仕事や趣味における社会の中での大人としての自分の居場所の対象となる可能性があるとした。このことを図示すると、図1のようになる。

そして、教師の役割とは、この将来の居場所の対象を提示することと、生徒や学生が将来社会の中で大人としての

居場所を探す中で、大人になる通過儀礼を指導し見守る役割があるとした。

先の検討では、居場所の中学時代、高校時代、そして、大学時代における各教科や各学問という学びの対象が、学ぶ側の生徒や学生において、いかなる意味を持って受け取られるかについて、さらには、教師の役割についての検討が不十分であった。そこで、本論の目的は、学校教育における学びの目的についての価値観を、原理という見方で、明らかにすることを第一の目的とする。そして、その中で教師の役割について明らかにすることを第二の目的とする。

小・中学校 → 高校 ・ 大学 → 社会

各教科との 出会い	各教科の 深化	専門科目 教養科目	仕事・ 趣味の 選択
--------------	------------	--------------	------------------

図1. 小中高大から社会へと続く対象

2. エリクソンの青年期の心理社会的発達段階 における心理社会的危機について

エリクソンのアイデンティティ概念は、ライフサイクル論の中に位置づけられている(Erikson,1959)。ライフサイクル論とは、生涯発達論であり、生涯を8つの発達段階に分けるものである。エリクソンの提示したアイデンティティは、青年期において危機、アイデンティティ危機を迎える。

^{*1} 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター准教授
2017年9月26日 受理

エリクソンは、ライフサイクルという生涯発達を八つの段階に区分した。それを、心理社会的発達段階と名付けた。そして、それぞれの発達段階において、心理社会的危機があるとした。さらに、危機を克服することで、活力を得るとしたのである。以下に、エリクソンによる図式(Erikson,1959)をまとめて図2に示した。

エリクソンによる心理社会的危機とは、肯定的な心理的内容と否定的な心理的内容のふたつの対立として示されている。例えば、青年期における心理社会的危機は、アイデンティティ達成・対・アイデンティティ拡散というふたつの心理的内容が示されている。この対立は、葛藤と捉えることができる。その葛藤がアイデンティティ危機である。つまり、青年期においては、アイデンティティ達成・対・アイデンティティ拡散という葛藤が生じるのである。

発達段階	心理社会的発達危機	: 活力
乳児期	信頼感・対・不信	: 希望
幼児期	自律性・対・恥、疑惑	: 意志
児童期	自発性・対・罪悪感	: 目的性
学童期	勤勉性・対・劣等感	: 有能感
青年期	アイデンティティ・対・アイデンティティ拡散	: 忠誠心
成人期	親密性・対・孤立	: 愛情
中年期	世代性・対・停滞	: 世話
老年期	統合性・対・絶望	: 知恵

図2. エリクソンの心理社会的発達段階、
心理社会的危機及び活力

エリクソンがアイデンティティは生涯発達し続けると述べている(Erikson,1959)ように、青年期において、一度アイデンティティ危機を迎えてアイデンティティ達成に至ったとしても、それで後の生涯においてはアイデンティティ危機に陥ることなく安泰かといえはそんなことはない、ということである。また、青年期にアイデンティティ危機に陥る者もいればそうでない者もいる。そして、青年期以降においても、アイデンティティ危機を迎える者もいればいない者もいる。ただ、生涯に渡っていつでも危機を迎える可能性はある。このように、エリクソンの見方は、青年期危機説に該当し、生涯危機説でもあるといえる。

3. エリクソンのアイデンティティ概念の要点

生涯発達論の中で、個人が自分の人生を生きていることを考えると、アイデンティティ危機とは、この自分の人生を生きていることについての危機であり、この人生を生きている自分への問いかけであるといえる(小沢,2004)。そして、この自分の人生をアイデンティティ危機を乗り越えて、納得できるものにすることを、アイデンティティ達成と捉えられる。

つまり、アイデンティティ危機である自分への違和感における自分とは、生涯と社会の中で生きているひとりの人間という自分となる。その自分に対して違和感を持っているのである。さらに、アイデンティティ達成とは、その自分に対して納得感をもっていることとなる(小沢,2004)。

このようなエリクソンのアイデンティティ概念において考慮すべき要点を以下に示すこととする(小沢,執筆中)。

第一に、自分というひとりの人間を問題とすることである。アイデンティティ・カードとは、日本語では身分証明書のことであり、自分をどこの誰かを示すものである。日本語にないアイデンティティという言葉は、この自分がひとりの人間であることを暗黙のうちに含んでいると考えられる。学校教育においては、児童、生徒、学生はという校種で呼び名は区分されるが、一貫して特定の個人であることには間違いはない。つまり、アイデンティティとは、ひとりの人間としての個人であり、個別の存在であるひとりの人間を対象とする概念であるといえる。

第二に、個人を中心にして社会の中で生きる全体を考慮することである。エリクソンはライフサイクル論の中で、アイデンティティ概念を位置づけている。エリクソンのライフサイクル論とは、ライフという生涯が育てられる側から育てる側に世代交代するというサイクルで表せられるように、社会の中で生涯に渡る道のりを生きていることを示している。この点から考慮すべきことは、ひとりの人間である個人は、社会という空間の中で生きており、個人が空間の中で生きるすべての面を考慮すべきであるということである。つまりは、児童であったら、学校だけではなく、家庭、地域というひとりの児童がこの社会の中で生き生活するすべての空間を問題にするということである。

第三に、生涯発達という誕生から老年期までの道のりを考慮すべきであるということである。先に示したように、エリクソンのライフサイクル論による心理社会的発達段階とは、誕生から老年期までの生涯を8つの発達段階に区分している。その中で、アイデンティティは生涯にわたって発達していくものであると、エリクソンは述べている。児童、生徒、学生という校種での呼び名の変化は、児童期から青年期前期、中期、後期と生涯にわたる発達段階を生きているひとりの個人を示している。ある発達段階に個人がいると、常に過去があり、そして、未来があり、生涯に渡る発達段階から見て、いまの発達段階にいるという視点で、現在の個人を見ることが考慮される。

以上のように、エリクソンのアイデンティティ概念にお

いては、個人、社会、生涯という要点を考慮すべきであるといえる。

4. 「何のために学ぶのか？」という問いに対する「役立つため！」という答えにみられる経済原理

次に、学校教育場面における生徒や学生における学びに、論点を移す。学び手の生徒や学生において、ときに発せられる、ある教科を「何のために学ぶのか？」という問いかけに着目してみる。この問いかけは、暗黙のうちに勉強するのは面倒なのでできるだけ、努力や労力をかけたくない、効率よく最大限の効果を最小限の努力で得たいという効率重視の考えをもとにした場合もあれば、純粋にその教科を学ぶ目的を問いつける場合もあるだろう。

また、現実問題として、高校生までは受験に必要なかどうか、その教科を学ぶかどうかの選択に関わってくることがある。つまり、受験に必要な教科は学ぶ必要がないと思ってしまうのである。これも効率を重視した生き方を、学びにも適用する姿である。

このように、「何のためにその教科を勉強するのか？」という問いかけが、「役に立つかどうか？」が背景にある問いかけであると考えられる。これは、まさに、外発的動機付けにおける報酬が学びの動機付けになっている姿を示している。この見方によると、短期的には、授業の内容がテストに出るかどうか気になる。そして、中期的には、受験で使うかどうか気になる。長期的には、社会に出て役に立つかどうか気になる。しかし、社会に出てから大人としての生活における長期的な展望を、中学生や高校そして大学生も、もつことは難しいのであり、社会に出て役に立つといわれても実感が持てないことが多い。となると、試験に出るか、受験で使うかが問題となり、試験に出ず成績に関係なければ、そして、受験に関係なければ、学ぶ必要はないという見方に陥ってしまう。

このような、暗黙のうちに、効率を求める学び方の問題に学び手は、さらされているのである。そして、現実的に考えると生徒や学生にとって、効率を求めることは、日常生活において便利な電子機器の発展による恩恵を常に受けている現代社会に生きている人間にとっては、当然の価値観である。こうした効率よく成果を得るという学びのスタイルは、「実学主義」と名付けられるものに相当する。

自分の将来の仕事に直結した内容を学び、将来の仕事において成果を出せる学力を得て、自分の努力や労力を将来の経済的な成果を出すことに集中させることは、学び手の立場に立てば、非難されるものではない。生徒や学生にとっては、社会に出てから仕事に就く際には、効率を求めいかにして経済的な利益を上げるかという、資本主義社会の競争の中で生きることとせざるを得ないのである。

このような「社会に出て役に立つものを学びたい」という、実学主義ともいえる思いは、効率を求め経済的な豊か

さを求める価値観を根底に持ち、この価値観は、資本主義社会を生きる上では必要なものであるということになる。自分が就いた仕事で経済的な報酬を得て、社会の中で経済的に自立することを目指すことは、大人として社会に出て生きる上では考えなければならないことである。このような学びにおける、社会に出て仕事に就く上で役に立つことを求め、効率と経済を求める見方を、「経済原理」に基づく学びと名付けることとする。

例えば、社会に出て仕事に就く上で役立つための内容とは何かを、最も基本的に考えると、「読み書きそろばん」であり、3R 'S である。これらは、社会に出て仕事に就く上でも、生活していく上でも基本的なものとかねてより、言われているものである。

5. 「何のために学ぶのか？」という問いに対する経済原理以外の答えを大村はまの詩から考える

経済原理を突き詰めれば、誰が優れており誰が劣っているのかという比較の中で、優劣や序列をある基準において決められ、個人はその中に位置づけられることとなる。そこで、教育を受けて学ぶことは、いかにしてその序列の中で高いところまで行くか、という生存競争になる。では、何のために、高次に行きたいのか。経済的に豊かになるためであるといえる。このようにみると、経済原理と優劣という評価が結びついているといえる。そこで、他者より優れていることを目指すという価値観における経済原理以外の学びの目的を検討する。

先に、エリクソンによれば、学童期の心理社会的発達段階における心理社会的危機は、勤勉性・対・劣等感である。そして、この葛藤を克服することによって、有能感という活力を得ると紹介した。そして、小沢(2014)は、この葛藤は、優劣を重んじる価値観が根底にあるとした。そして、学びにおける優劣を重んじる価値観以外の提言として、教育者の大村はま(荻谷, 2012)による「優劣の彼方に」という詩を示した。さらに、佐伯(1995)による学びについての「理解」の重視を論じた。そこで、本論では、経済原理、実学主義、そして、優劣を重んじる価値観以外の見方を検討していくこととする。そこで、大村はまの詩を提示し、優劣を重んじる経済原理以外の学びの原理を探究していく。

優劣の彼方に

大村はま

優か劣か

そんなことが話題になる、
そんなすきまのないそういう世界。
つきつめた姿。
持てるものを
持たせられたものを
出し切っている

生かし切っている
そんな姿こそ。

優か劣か、
自分はいわゆるできる子なのか
いわゆるできない子なのか、
そんなことを
教師も子どもも
しばし忘れて、
学びひたり
教えひたっている、
そんな世界を
見つめてきた。

教師も子どもも
学びひたり
教えひたっている
それは優劣のかなた。
ほんとうに持っているもの
授かっているものを出し切って、
打ち込んで学びひたり
教えひたっている
優劣を論じあい
気にしあう世界ではない。

今はできるできないを
気にしすぎて、
持っているもの
授かっているものを
出し切れていないのではないか。

成績をつけなければ、
合格者をきめなければ、
それはそうなのだ。
今の日本では
教師も子どもも
力のかぎりやっていないのだ
やらせていないのだ。
優劣のなかで
あえいでいる。

学びひたり
教えひたろう
優劣のかなたで。

大村はまず、「優か劣か、そんなことが話題になる、そんなすきまのないそういう世界。」があるとする。それに対して、「持てるものを持たせられたものを出し切っている 生かし切っている そんな姿」があるという。その世界とは、「優か劣か、自分はいわゆるできる子なのか いわゆるできない子なのか、そんなことを教師も子どももし

ばし忘れて、学びひたり教えひたっている、そんな世界」である。そして、この世界は、「優劣のかなた」にある。そこでは、「ほんとうに持っているもの 授かっているものを出し切って、打ち込んで学びひたり教えひたっている」であり、「優劣を論じあい気にしあう世界ではない。」という。「今の日本では教師も子どもも力のかぎりやっていないのだ やらせていないのだ。優劣のなかで あえいでいる。」そこで、「学びひたり 教えひたろう 優劣のかなたで。」とする。

先に、筆者はこのような優劣をこえた世界における学びにおいては、佐伯による理解が重んじられるとした(小沢, 2014)。さて、本論ではこの佐伯の理解の指摘から、経済原理に変わる学びの原理を、さらに探っていくこととする。

6. 大村はまの優劣をこえた学びの世界を佐伯の理解論から検討する

学ぶ対象の内容にひたるとは、いかなることなのだろうか。そのヒントに、佐伯の理解の指摘を用いてみる。理解とは何かについての佐伯(1995)の記述を、佐伯による理解論として、以下のように捉えてみる。

まず、第一に、理解とは対象についての知識の獲得を元に、認識の転換が生じることでありといえる。そして、そこには、感情的な納得の実感が伴う。それは言い換えれば、「これは、面白い！」である。つまり、知識の獲得を行えば、知識を得たという達成感を得られるだろう。しかし、面白いという知的好奇心が満たされることはない。面白いと思えるには、知識の獲得をもとに、さらに、認識の転換つまり、理解が生じるからこそ、面白いと思えるのであるといえる。

第二に、理解の前提としての疑問、問いかけについてである。つまり、疑問という問いかけが、まず前提にあり、その意識における疑問に対して、答えが得られた時に、認識の転換が生じ、感情的な納得の実感が伴うのである。言い換えれば、疑問がないところに、いくら知識の獲得が蓄積されても、理解には至らないということである。佐伯(1995)は、疑問を持つこと自体、わからないこと自体においても面白いと思える経験があるとする。この疑問を発し、疑問についての答えを求める思いを、知的好奇心(波多野・稲垣, 1973)と言い換えることができる。

第三に、疑問に対して答えを得ること、そして、理解を得るために探究していく活動は、人類の文化の産物としての学問に至ることである。佐伯(1995)は、なぜ直角は90度であり、一周は360度なのかという素朴な疑問を持った高校生の例を示している。その高校生は、この疑問を調べていくと18世紀の数学者達の会議において、地球が太陽を回る日数である365日からその端数の5日を取って360としたという経緯があったことを知る。また、教科書においては、決まり事として単位のひとつとして、記載されているが、その歴史的経緯は、様々な理由によって決められたルールであることを知るのである。つまり、学び手であ

る中学生や高校生の素朴な疑問と同じ疑問を發した過去の学者が探究をもとにして明らかにしたことがまとめられ、その蓄積が学問という営みとなって、人類の文化の産物となったといえる。この経緯のもとに、学校教育における教科書が作られ、学び手が学んでいるのである。

以上のように、佐伯の理解論においては、面白いという認識及び感情の出現、疑問という問いかけ、人類の文化の産物との出会いが要点としてあげることができる。

7. 佐伯の理解論をもとにした享受論

そこで、学ぶことの目的に関わる経済原理以外の原理を明らかにするために、佐伯の理解論とアイデンティティ概念を参考にして、検討していく。

まず、佐伯の理解論のもとに、自然科学系の科目に対してと同様に、人文社会系の科目及び、芸術科目も対象にして考える。すると、文学、芸術等における、認識や感情の変化は、感動という気持ちの生起ということができる。そして、知的な理解を求める条件である疑問という問いかけは、精神的な豊かさまたは感動を享受することを求める思いであるということができる。そして、人類の文化の産物との出会いとは、文学、芸術等における作品との出会いとなる。このように、理解論を享受論としてその学問対象と心理的内容を広げて捉えることができる。そして、学びにおける理解・享受論を、経済原理に替わる学びの目的を考える布石とする。

さきに、エリクソンのアイデンティティ概念における個人・社会・生涯という要点をもつとした。この要点をもつアイデンティティ概念から、学びにおいて求めるものを検討してみる。エリクソンは青年期において職業的アイデンティティが青年にとって重要な問題であると述べている(Erikson, 1959)。そして、生涯発達の中で青年期においていかなる職業に就くことが自分自身の納得のいく職業選択となるのか、という職業的アイデンティティの選択が、青年にとって、アイデンティティ危機を引き起こす可能性がある。この学校教育の中でのいかなる職業に就くかという問題は、経済原理に基づく学びに関わるものである。いかなる職業に就き、経済活動を行い、社会的経済的に自立した大人となるかという問題は、中学、高校、または大学と進む中で、生徒及び学生の葛藤を引き起こす問題となりうる。

このような青年期における職業的アイデンティティの問題は、学びの目的としては社会におけるいかなる経済活動のために学ぶかということになり、経済原理に基づく学びであるということになる。

8. 学びの価値観としての教養原理の提言

さて、職業的アイデンティティの問題において、経済原理に基づく学びの価値観を論じたが、さらに、学びの価値観である原理を新たに付け加えてもつことを、先に示した

学びにおける理解・享受論から検討してみる。

職業選択のための学びの目的以外とは、働くことという生産活動に従事すること以外における、学校教育における学びである。生徒、学生という個人である青年が、仕事以外の社会の中で生きる上での対象となる可能性のある学びとは、例えば趣味という活動における学びとなる。趣味においては、仕事以外の社会において、さらには、生涯にわたってひとりの個人が自分の生活を精神的に豊かにするための学びである。このような趣味における学びの対象は、例えば、市民講座やカルチャーセンターにおける講座等で行われているものがある。この学びは、どのような目的で学ばれているのだろうか。

それは、まさに学びのための学びであり、何かの学び以外の目的を求めての学びではなく、つまり外発的動機付けに基づく学びではなく、内発的動機付けに基づく学びである。そして、この学びでは、対象に対しての理解と享受を目的とし、認識の変化である理解または感動の生起があり、疑問という問いかけや情緒的渴望がその条件にある。そして、人類の文化の産物である学問、芸術等との出会いがある学びである。つまりは、先に示した、理解・享受論に基づく学びであるといえる。

先に示したように、このような学びは、社会人としては、仕事という経済活動以外の活動で行われる趣味等において行われるものであり、つまり、学校教育を終えてから生涯にわたって行われる可能性があるものである。社会の中で生きる上で、生産活動だけをするのではない。余暇をいかに過ごすか、趣味をどうするか、生活全体をどのように豊かなものとするか。つまり、経済原理以外の原理を、学校教育の時から考慮して、大人として社会の中でいかに生きるか、居場所の対象の選択の可能性として、各教科、各学問を提示する役割が、学校教育においてある。個人が、職業選択以外で、面白さと渴望と人類の文化の産物との出会いを得られることが学びにはある。それは、生涯にわたって、社会の中で、ひとりの個人が追求できるものである。その学びとは、いかなる原理に基づく学びなのか。それを教養という言葉から検討していく。

教養とは、知的なファッションではなく、生涯、社会、個人、人類の文化の産物との出会い、面白さ、渴望を含むものである。この学びに基づく見方を、実学主義に対する「教養主義」ということができ、この学びに基づく価値観を、経済原理に対する「教養原理」と名付けることができる。つまり、何のために学ぶのかという問いかけに対して、生涯を社会の中で生きる個人が、面白さを求め精神的渴望を満たすことを求めて人類の文化の産物との出会うことで、アイデンティティを得ること、つまりは、職業以外の居場所で自分の人生を納得するものとするをを目指す学びがあり、その学びを教養主義に基づく学びと捉え、この学びの価値観である原理を、教養原理と名付けることとする。このような見方を、図3に示す。

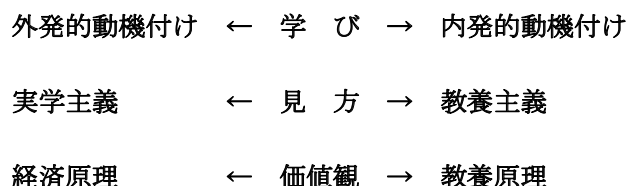


図3. ふたつの学びの見方、価値観

9. ふたつの学びの原理における教師の役割

先に、これまでの学校教育における教科が、生徒や学生の将来の社会の中での大人としての居場所における仕事や趣味になる可能性において、その出会いと深化をもたらすことを示した。その中で、生徒や学生においては、仕事の選択の場合では、経済原理という学びの目的をもつと考えられた。そして、趣味においては生涯学習を視野に入れて、教養原理という学びの目的をもつと考えられた。そして、特に教養原理という学びの目的においては、理解・教授論が学びの内容として適用されると考えられたのである。

つまり、経済原理においては、知識の獲得のみでも通用する。すると、単なる知識の伝達のみを教師の役割とすることができる。この知識の伝達を教師の役割とする見方を、伝達モデルとして、図3. のように示してみる。

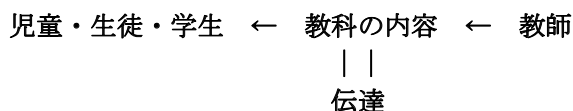


図3. 教師の役割における伝達モデル

これに対して、教養原理における学びの目的における教師の役割を考えてみる。まず、単なる知識の獲得だけでは、学ぶ対象の内容に対する理解・享受が生起しない。そして、この理解・享受論にもとづく学びにおいて、重要なことは教科（学問領域）を、ひとつの世界として捉えて、その世界と学び手である児童・生徒・学生との出会いを、教師が設定するのである。そして、教科の世界の中に導き、この世界の内容についての理解と享受を深化させる。このような役割は、教師が担うと考えられる。

つまり、学び手である児童・生徒・学生を教科の世界に出会わせ、そして、その世界に導き、さらには、教科の世界の内容を理解・享受させることに導くのである。つまり、学び手である児童・生徒・学生のいる世界から、教師自身が架け橋となり、教科の世界へと導き、内容を進化させる役割を教師が担うのである。この教師の役割を、架け橋モデルとして、図4. のように示すことができる。

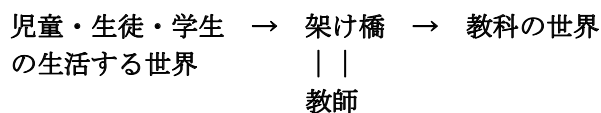


図4. 教師の役割における架け橋モデル

このような理解・享受論による学びは、経済原理にもとづく学びの目的を持ったとしても、その学びを有効なものにすると考えられる。この点で、理解・享受論に基づく学びは、経済原理による学びの目的をもったとしても、有効であり、さらには、その学びを単なる知識の獲得から、内容の理解・享受をもたらすものとして、学びを深めていくものとなる。つまり、経済原理においても、教養原理においても、これらのふたつの学びの目的について、理解・享受論に基づく学びは、その学びを深めるものとなる。そして、学び手と教科の世界をつなぐ架け橋という役割を、教師がすることによって、教科と学び手との出会いを設定し、その内容を理解・享受に導き、将来の仕事や趣味という社会の中での大人として生きる上での居場所の対象となる可能性を提示することができる。

このような教師の架け橋モデルという役割によって、児童・生徒・学生は、社会の中で大人としての自分の居場所を得ることの助けとなると考えられる。このことによって、自分の人生を納得いくものとするというアイデンティティ達成を目指すことの教育が、学校教育によって行うことができると考えられる。

引用文献

- 1) 小沢一仁 2004 アイデンティティ危機における自分自身への違和感からアイデンティティを再考する. 東京工芸大工学部紀要, 27(2), 79-88.
- 2) 小沢一仁 2014 教育心理学的視点からエリクソンのライフサイクル論とアイデンティティ概念を検討する. 東京工芸大工学部紀要, 37(2), 97-102.
- 3) Erikson, E.H. 1959. Psychological Issues Identity and Life cycle. International Universities Press, Inc. (西平直・中島由恵, 訳. アイデンティティとライフサイクル. (2011). 誠信書房.; (小此木啓吾, 訳編. (1973). 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル. 誠信書房.)
- 4) 小沢一仁 執筆中
- 5) 荻谷 夏子 2012 大村はま 優劣のかなたに 一遺された60のことば ちくま学芸文庫
- 6) 佐伯 胖 1995 「わかる」ということの意味 岩波書店
- 7) 波多野諄余夫・稲垣佳世子 1973 知的好奇心 中公新書
- 8) 佐伯 胖 1995 「学ぶ」ということの意味 岩波書店